

令和元年6月5日現在

機関番号：32658

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02937

研究課題名(和文)日本人英語学習者の話し言葉コーパスにおける語用論的能力の基準特性の抽出と分析

研究課題名(英文) Extracting and Analyzing Criterial Pragmatic Features in a Spoken Corpus of Japanese Learners of English

研究代表者

三浦 愛香 (MIURA, Aika)

東京農業大学・農学部・准教授

研究者番号：20642276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人英語学習者の話し言葉コーパスであるNICT JLEコーパスを用い、異なる習得段階(CEFR A1、A2及びB1レベル)にある学習者の語用論的能力を弁別する言語特徴(基準特性)を抽出した。具体的には、買い物のロールプレイで発話された要求で使用された言語項目を発話の機能ごとに分類するアノテーション・スキームを構築した。習得段階が上がるほど言語項目のパリエーションが豊かになり、直接的から間接的な表現の割合が増えるが、B1レベルが必ずしも語用論的に適切な発話をしているとは限らない結果が得られた。コーパス研究が、これまで主流な抽出タスクによる先行研究を計量的に補完できることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、学習者の対象言語における語用論的能力を研究する分野である中間言語語用論において、学習者コーパスが貢献できることを示した点で大きな学術的意義があると言える。従来の主流なデータ手法である抽出タスクでは、対話者の役割や社会的な力関係や距離を調整することで、着目したい発話行為を直接的に抽出できるが、学習者の実際の発話と乖離していると批判されてきた。本研究は、自然発生的な話し言葉から成る学習者コーパスを用いることによって、日本人英語学習者がどのように語用論的能力を発達させていくかの変容を統計的に明らかにし、先行研究による結果や考察を統計的に補完したり、再検証したりすることの可能性を示唆した。

研究成果の概要(英文)：The current study aimed to extract criterial features of pragmatic competence of Japanese learners of English at different proficiency levels (i.e., the CEFR A1, A2 and B1 levels), investigating the NICT JLE Corpus. The author constructed annotation schemes to extract and analyze linguistic features of requestive speech acts and the utterance functions in shopping role plays. The study confirmed the results derived from the past studies which adopted the predominant approaches to investigating requests using the elicitation tasks: the use of conventionally indirect features (e.g., ability modals "can") tended to increase and that of direct features (e.g., ellipses and desire verbs "want") decrease with increasing proficiency, but B1 group showed some pragmatically deviant performance. The use of the NICT JLE Corpus allowed the author not only to profile what learners can actually do pragmatically at each level, but also supplement the non-corpus-based past studies with corpus evidence.

研究分野：外国語教育

キーワード：コーパス言語学 学習者コーパス 第二言語習得 要求の発話行為 コーパス・アノテーション 語用論 話し言葉コーパス 英語教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究分野は「中間言語語用論」に位置づけられる。外国語学習者が社会的に適切な発話を実現できるコミュニケーション能力の習得を分析する領域で、特に語用論に基づいて、要求や拒否、反対意見、苦情、謝罪等の発話行為に着目することが多い。中間言語語用論では、文化的知識や社会的規範の理解を伴う談話的な制約に則って、これらの発話行為がなされているかを検証する (Kasper & Bulm-Kulka, 1993)。本分野において、最も主流なデータ収集法としては、Discourse Completion Task (DCT) と呼ばれる抽出タスクがある (Kasper & Rose, 2002)。しかし、この手法は、談話完成タスクとして被験者に会話の続きを書いて完成させ、検証対象とする発話行為を直接抽出させるものであり、学習者が実際の状況で遂行する発話行為の実態と乖離しているのではないかと批判されてきた (Archer, Aijmer, & Wichmann, 2012; Leech, 2014)。

(2) 一方、近年「学習者コーパス」に収集された様々なテキストを調査・探索することによって、より多くの被験者データを得られ、頻度情報を中心とする信頼性の高い統計データの分析によって、その研究結果を一般化する妥当性が高まってきた (Granger, 2002)。ただし、表層的な言語項目に現れない意味を扱う「語用論分析」においては、発話がどのような文脈で使われているのかを一つ一つ目で判断する必要があるため、大量の言語データからコンピュータで自動的に特定の言語項目を抽出したり、統計的に解析したりするコーパス研究に応用することは難しいとされてきた。

(3) そこで、研究代表者 (Miura, 2009 等) は、Form-to-function approach (表層的な言語項目を抽出してその機能を分析する手法) (Rühlemann & Aijmer, 2015) に基づき、well や I mean など「談話標識 (対話をよりスムーズにさせる語用論的機能を持つ言語項目)」を日本人英語学習者の話し言葉コーパスである National Institute of Information and Communications Technology Japanese Learner English (NICT JLE) Corpus から計量的に抽出し、習得段階別にその使用頻度を調査した。しかし、談話標識は多機能を持つことから分類が難しいだけでなく、本来持つ機能ではなく、フィルターとして機能している可能性が示唆されたことから、最終的には手作業による主観的な判断に頼らざるを得ない状況が報告された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、日本人英語学習者の「語用論的能力」の習得段階を弁別する言語特徴(「基準特性」) (Hawkins & Filipović, 2012) を抽出することである。これまで主流とされていた抽出タスクによる中間言語語用論の分野において、大規模な言語データである学習者コーパスを活用した検証を実施することで、日本人英語学習者の語用論的能力の発達推移を明らかにすることを目的とする。具体的には、前述の NICT JLE Corpus を用いて、買い物のやり取りにおける「要求」の発話行為を特定し、CEFR レベルの A1 (初級)、A2 (初中級) 及び B1 (中級) の3つの異なる習得段階を弁別する基準特性を抽出する。

(2) 語用論能力は、語用言語学的能力と社会語用論的能力から成る (Leech, 2014)。先行研究の多くが、Blum-Kulka, House & Kasper (1989) のコーディング・スキームに基づき要求の発話行為で使用される言語項目を語用言語学的能力を一端を成す特徴として分類する。本研究では、前述のスキームを基に、発達段階にある学習者の発話を特徴付ける言語項目や買い物の発話に特有な言語項目を抽出するための多層かつ多重のアノテーション・スキームを開発する。そのスキームでは、発話の機能だけでなく初級や初中級学習者に多いエラーや「言い直し」、「繰り返し」等話し言葉に特徴的な現象もあわせて特定する。さらに、学習者コーパスから抽出された発話が社会的に適切かどうかをポライトネス (丁寧度) の観点から判断する調査を行い、学習者コーパスを用いて社会語用論的能力の測定が可能なのかも探る。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、NICT JLE Corpus において買い物ロールプレイを与えられた学習者である A1 レベル 68 名、A2 レベル 114 名、そして B1 レベル 66 名の発話を対象に、「Function-to-form」(言語機能を特定しそこで使用された言語項目を抽出する) (Rühlemann & Aijmer, 2015) の手法を用いて要求の発話行為を抽出するアノテーション・スキームを開発し、手作業でアノテーションをした。なお、A1 及び A2 レベルでは「購入」、B1 レベルでは「返品交渉」のタスクが与えられている。

(2) アノテーション・スキーム 1: 要求の発話行為の言語項目を特定する。出現した言語項目に基づき、「直接的なストラテジー」、「慣例的な表現を用いた間接的なストラテジー (以下間接的ストラテジー)」、「そのいずれにも分類できないもの」の3つに分類する。なお、本スキームにて、要求の繰り返し、言い直し、訂正などの意味交渉や発話の修復の現象も特定する。

(3) アノテーション・スキーム 2: 全発話の言語機能を特定する。言語機能は、「購入に直接関するやり取り」と「購入や返品交渉の際に生じるコミュニケーションのやり取り」の2つに大きく分類され、下位分類にさらに分けられる。

(4) アノテーション・スキーム 3: 全発話の文法的正確性・談話的適切性を判断する。度合いの高いものと低いものに二分するが、下位分類として母語の影響を受けたトピック・コメントの構造を持つか、文脈上意味の通った発話であるか、母語である日本語の使用があるかの項目がある。

(5) 社会語用論的能力に関する判断調査：上記のスキーム(2)及び(3)を使って抽出した様々な状況にある要求の発話を日本の大学の英語教員（母語話者及び日本人各 10 名）に提示し、自分が店員として客に接する場面を想定してもらい、それらの要求がポライトネスの観点から適切性について判断してもらおう。ケンドールの一致係数を測定し、一致度が高ければ、ポライトネスの度合いを学習者コーパスにアノテーションして社会語用論的能力を習得段階別に観察できるかを検討する。

4. 研究成果

(1) 本研究は、日本人英語学習者の語用論的能力を弁別する基準特性を NICT JLE Corpus から抽出し、語用論的能力の発達の推移を明らかにすることである。なお、本研究では、習得段階ごとに抽出した特定の言語特徴において、その出現頻度に有意差があるかカイ二乗検定を用いて検定し、有意差があれば2つの習得段階を弁別する基準特性とする。さらに、これまで中間言語語用論の分野で主流ではなかった学習者コーパスの有用性とその限界についても探る。

(2) アノテーション・スキーム 1 による言語項目の抽出：3つの異なる習得段階の学習者による要求の発話行為は、表 1 が示すように、習得段階が上がるほど、「間接的ストラテジー」の割合が増え、「直接的ストラテジー」の割合が減る傾向が観察された。この傾向は DCT を用いた先行研究 (Trosborg, 1995; Hill, 1997; Flores Salgado, 2011) の結果と一致している。また、A1 及び A2 では、「エラー等を含む不完全な発話のため分類不可」の発話が少数見られた。なお、3つの分類において、A1 と A2 ($\chi^2=12.44$, $df=2$, $p=.002$, Cramer's $V=.068$) 及び A2 と B1 ($\chi^2=13.43$, $df=1$, $p=.0002$, Cramer's $V=.108$) に統計的有意差があった。

表 1 習得段階別に抽出した要求のストラテジーとその言語項目の分布

	A1 学習者 68 名	A2 学習者 114 名	B1 学習者 66 名
直接的ストラテジー	297 (65.71%)	500 (55.87%)	115 (43.73%)
要望を示す言語項目	119 (26.33%)	256 (28.6%)	45 (17.11%)
単語のみの断片的な言語項目	81 (17.92%)	58 (6.48%)	4 (1.52%)
モダリティーの使用のない平叙文	51 (11.28%)	52 (5.81%)	2 (0.76%)
命令文	20 (4.42%)	58 (6.48%)	16 (6.08%)
願望を示す言語項目	13 (2.88%)	62 (6.93%)	41 (15.59%)
その他	11 (2.43%)	14 (1.57%)	7 (2.68%)
間接的ストラテジー	149 (32.96%)	385 (43.02%)	148 (56.27%)
購入したい物の存在を尋ねる文	69 (15.27%)	160 (17.88%)	0 (0%)
自分の意思を明示する文	42 (9.29%)	113 (12.63%)	3 (1.14%)
可能・許可の助動詞	34 (7.52%)	93 (10.39%)	99 (37.64%)
相手の意思を確認する文	2 (0.44%)	11 (1.23%)	12 (4.56%)
相手に提案する文	0 (0%)	4 (0.45%)	8 (3.04%)
I hope/wonder/appreciate 等を使った文	1 (0.22%)	3 (0.34%)	13 (4.94%)
可能性を尋ねる文	1 (0.22%)	1 (0.11%)	13 (4.94%)
エラー等を含む不完全な発話のため分類不可	6 (1.33%)	11 (1.23%)	0 (0%)

直接的ストラテジーでは、A1 と A2 ($\chi^2=57.05$, $df=5$, $p<.00001$, Cramer's $V=.19$) 及び A2 と B1 ($\chi^2=49.42$, $df=4$, $p<.00001$, Cramer's $V=.20$) に有意差があり、習得段階を弁別する基準特性としては、表 1 の示す「単語のみの断片的な言語項目（以下「単語のみ）」(例：“More large size,” “Ah er card please?”) 及び「モダリティーの使用がない平叙文（以下「平叙文）」がある。特に、後者は母語の影響を受けたと思われるトピック・コメントの構造を持つもの(例：“Er color is brown.”)や日常的な習慣を表す現在形の文になっているもの(例：“Um today I buy my suits,” “I try it.”)が観察された。なお、A2 と B1 を弁別する基準特性としては、A2 の頻度率が B1 の約 1.5~2 倍となる「願望を示す言語項目」(例：would like や would rather) や「要望を示す言語項目」(例：want や need) B1 がほとんど発話していない「単語のみ」や「平叙文」が観察された。

間接的ストラテジーでは、A1 と A2 に統計的有意差はなかったが、A2 と B1 には有意差があり ($\chi^2=173.43$, $df=3$, $p<.00001$, Cramer's $V=.04$) 基準特性としては、B1 が3倍以上の頻度率を示した「可能・許可の助動詞」(例：can, could, may) の他、B1 がほとんど発話していない「購入したい物の存在を尋ねる文」(例：“Do you have small one?,” “Is there another color?,” “Mm I'm looking for ur some shirts.”) や「自分の意思を明示する文」(例：“I will buy this,” “Er I like black color,” “I decided to buy this,” “Today I I come here to see some personal computers.”) が特定された。後者の言語項目は、A1 及び A2 が与えられた「購入」のタスクに特有のものと考えられ、「返品交渉」が与えられた B1 ではほとんど見られないことから、タスクの影響を受けていると考えられる。

なお、本スキームでは、発話の修復についてもアノテーションをした。観察された修復のうち、出現頻度は低いが、特に A1 および A2 の違いを特徴付けるものとして以下の2つを述べる。まず一つ目は、「詳細説明」というパターンで、以下の例のように、異なる言語項目を使っ

た要求の発話を重ねてより詳しく述べるものである。“Umm. I want a hmm I want a basketball shoes. And its color is black. And err size er is Japanese size is err twenty-four size.”つまり、「要望を表す言語項目」の want を使った発話に、「平叙文」を使った発話を繰り返している。「詳細説明」のうち、上記のような繰り返しは、A1 は 25 件中 12 件 (48%)、A2 は 32 件中 1 件 (3.1%) であった。A2 になると、関係代名詞を使い一文になる発話が出現する(例：“And uh I want a suit which whose color is uh gray.”)ことから、文法構造の発達により、こうした繰り返しが減っていくと考えられる。二つ目としては、「発話の主要項目の言い直し」というパターンで、以下のように、一つの発話内で、want を他の言語項目に言い換えるものである。“Now, so I want to uhhh um um could you show me ahh some um wire key?” A1 は言い直しのうち 18 件中 2 件 (11.1%)、A2 は 52 件中 12 件 (23.1%) 本パターンが観察された。Want は要求の度合いの負荷が大きいとされていることから、A2 になると Face Threatening Act (FTA) (Brown & Levinson, 1989) の意識を持つようになり、want を不適切だと判断し、別の言語項目に言い換えている可能性が考えられる。

(3) アノテーション・スキーム 2 による言語機能の特定：A1 及び A2 による発話のうち「購入に直接関するやり取り (以下「購入」)」は 515 件 (59.2%) 及び 1,006 件 (55.03%)、「購入や返品交渉の際に生じるコミュニケーションのやり取り (以下「コミュニケーション」)」は 355 件 (40.8%) 及び 822 件 (45%) であった。一方で、B1 の発話は前者が 7 件 (0.65%) であり、後者は 1072 件 (99.35%) であった。なお、A1 と A2 に統計的有意差はないが、A2 と B1 は有意差が観察され (コミュニケーション: $\chi^2 = 333.72$, $df = 6$, $p < .00001$, Cramer's $V = .3$)、発話の機能分布におけるタスクの影響の度合いが大きいことが判明した。「コミュニケーション」の「背景状況を説明する」の機能に着目すると、A1 は 45 件 (12.68%)、A2 は 151 件 (18.37%) である一方、B1 は 459 件 (42.82%) である。この結果より、B1 の方が FTA を意識し、交渉時の要求の負荷を軽減させるために、要求の発話行為を修飾する外的修正を多用する傾向にあるとも言えるが、「返品交渉」は「購入」より要求の相手への負荷が高いため、発達上の特徴なのかタスクの影響なのかは不明である。なお、以下の例のように「相手の発話を確認する」機能は、A1 は 150 件 (42.25%)、A2 は 302 件 (36.74%)、B1 は 123 件 (11.47%) であった。試験官の発話の一部を繰り返し、試験官の発話を確認したり応答したりしている特徴は、タスクの影響は少ないと考えられ、先行研究で述べられている習得段階の低い学習者に見られる verbosity (Faerch & Kasper, 1989) や the waffle phenomenon (Edmondston & House, 1991) とと言える。

試験官：“Well oh maybe we can give you ten percent discount.”

学習者：“Oh. Ten percent discount.”

(4) アノテーション・スキーム 3 による文法的正確性・談話的適切性の特定：表 2 が示す結果が得られた。A1 と A2 に有意差はなかったが、A2 と B1 に有意差があった ($\chi^2 = 39.5$, $df = 1$, $p < .00001$, Cramer's $V = .12$)。

表 2 習得段階別に特定した文法的正確性・談話的適切性の度合いとその分布

	A1 学習者 68 名	A2 学習者 114 名	B1 学習者 66 名
文法的正確性・談話的適切性が高い	454 (52.18%)	1005 (54.98%)	721 (66.82%)
文法的正確性・談話的適切性が低い			
文脈上意味が通る	363 (41.72%)	763 (41.74%)	344 (31.88%)
文脈上意味がやや通らない	32 (3.68%)	39 (2.13%)	12 (1.11%)
文脈上意味が通らない	19 (2.18%)	20 (1.09%)	2 (0.19%)
日本語の使用	2 (0.23%)	1 (0.05%)	0 (0%)

(5) 社会語用論的能力に関する判断調査：本研究にて使用したアノテーション・ツール UAM CorpusTool は複数のアノテーション・スキームを複合的に組み合わせて特定の言語項目を抽出することが可能である。本研究では、要求の発話行為が持つ言語機能のうち、「返品交渉」、「試着の依頼」及び「購入の意思表示」の 3 つの頻度が高いと判明した。また発話行為の言語項目として抽出されたパターン全 24 項目をそれぞれの機能 (状況) 別に判断者 20 名に提示し、ポライトネスの観点より「適切である」、「やや不適切である」、「不適切である」の 3 段階で判断してもらった。結果、ケンドールの一致係数が表 3 のようになった。全体的に日本人教員の判断の一致度が母語話者より低く、3 つの状況の一致度も全体的にそれほど高いとは言えないため、学習者コーパスにポライトネスの度合いをアノテーションすることは断念した。ただし、B1 による「返品交渉」にて「相手に提案する文」(例：So why can't you exchange it?) については、ポライトネスの観点から全判断者が不適切とした。

表 3 異なる状況にある要求の発話行為の判断調査の一致度

	返品交渉	試着の依頼	購入の意思表示
合計 20 名	$W = .64$ ($p < .0001$)	$W = .5$ ($p < .01$)	$W = .41$ ($p < .0001$)
母語話者 10 名	$W = .75$ ($p < .0001$)	$W = .73$ ($p < .01$)	$W = .47$ ($p < .0001$)
日本人 10 名	$W = .56$ ($p < .0001$)	$W = .41$ ($p < .01$)	$W = .38$ ($p = .0004$)

(6) 言語機能別にみた要求の発話行為における A1 と A2 を弁別する基準特性について：前述のアノテーション・スキームを組み合わせた結果、以下が観察された。

文法的正確性・談話的適切性については、B1 に関しては、前述の(4)に示された結果と同じような分布になっていた。しかし、A1 及び A2 に関しては、「高い」要求はそれぞれ 40.32%、43.23%と 50%に満たず、一方「低い」が「文脈上意味が通る」要求は、53.87%、54.15%と逆転していた。さらに言語機能ごとに観察すると、「購入の意思」を示す機能では、A1 及び A2 とともに、54.74%、55.26%が「高い」と特定された。一方、「価格や色、大きさや種類など品物に関して様々な希望を述べる」機能では、「高い」要求は、28.47%及び 34.2%と大幅に下がる。これは、前者は決まり文句(例：“I want to buy it,” “I’m looking for ur pants, too,” “I’ll buy it.”)等を使うことが多いのに対し、後者では、自分で文を構築する必要があるため、文法的正確性・談話的適切性が下がったと考えられる。その要因は、「単語のみ」や母語の影響を受けたトピック・コメントの構造を持つ「平叙文」(例：“The color is black.”)といった言語特徴の割合が前者に比べて高いことが考えられる。

さらに、「購入の意思」の言語機能については、A1 と A2 において統計的有意差が観察された ($\chi^2 = 17.26$, $df = 4$, $p = .00172$, Cramer’s $V = .18$)。両者とも要望を示す言語項目の使用頻度が占める割合が最も大きい (A1: 44.2%、32.6%)。ところが、A1 においては、「平叙文」の占める割合は 12.6%だが、A2 は 5.3%である。A2 ではこれらの平叙文の代わりに、「願望を示す言語項目」(15.8%)や「自分の意思を明示する文」(25.3%)「購入したい物の存在を尋ねる文」(17.4%)の割合が上がり、A2 の方がより適切かつ丁寧と思われる言語項目の定着とバリエーションが増えていると言える。

(7) 本研究は、アノテーションの信頼性や再現等いくつかの改善点や、観察できる言語項目におけるタスクの影響、コーパスを使った社会語用論的能力の検証の難しさ等課題点がいくつか挙げられるが、NICT JLE Corpus における要求の発話行為の語用言語学的な基準特性を抽出することにより、語彙文法的な発達だけではなく、FTA を学習者がどの程度意識しているのかの推移も推察することができたと言える。中間言語語用論において、DCT に基づいた先行研究の結果や考察の妥当性を、学習者コーパスを用いて再検証し、補完することができることが本研究によって示唆された。

<引用文献>

- Archer, D., Aijmer, K., & Wichmann, A. (2012). *Pragmatics: An advanced resource book for students*. Abingdon: Routledge.
- Edmondston, W., & House, J. (1991). Do learners talk too much? The waffle phenomenon in interlanguage pragmatics. In R. Phillipson, E. Kellerman, L. Selinker, M. Sharwood Smith., & M. Swain (Eds.), *Foreign/second language pedagogy research* (pp. 273-287). Clevedon: Multilingual Matters.
- Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (1989). Investigating cross-cultural pragmatics: An introductory overview. In S. Blum-Kulka, J. House, & G. Kasper (Eds.), *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies* (pp. 1-34). Norwood, NJ: Ablex.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Faerch, C., & Kasper, G. (1989). Internal and external modification in interlanguage request realization. In S. Blum-Kulka, S. J. House, & G. Kasper (Eds.), *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies* (pp. 221-247). Norwood, NJ: Ablex.
- Flores Salgado, E. (2011). *The pragmatics of requests and apologies: Developmental patterns of Mexican students*. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Granger, S. (2002). A bird’s-eye view of learner corpus research. In S. Granger, J. Hung, & S. Petch-Tyson (Eds.), *Computer learner corpora, second language acquisition and foreign language teaching* (pp. 3-18). London: Longman.
- Hawkins, J. A., & Filipović, L. (2012). *Criteria features in L2 English: Specifying the reference levels of the Common European Framework*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hill, T. (1997). *The development of pragmatic competence in an EFL context*. (Unpublished doctoral dissertation). Temple University, Tokyo.
- Kasper, G., & Blum-Kulka, S. (1993). Interlanguage pragmatics: An introduction. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp. 3-17). Oxford: Oxford University Press.
- Kasper, G., & Rose, K. R. (2002). *Pragmatic development in a second language*. Malden: Blackwell Publishing.
- Leech, G. (2014). *The pragmatics of politeness*. Oxford: Oxford University Press.
- Miura, A. (2009). A study of L2 spoken corpora: The gap between productive skills of Japanese EFL learners and the corpus-based ELT textbooks. *OnCUE Journal*,

3(2), 136-159.

- Rühlemann, C., & Aijmer, K. (2015). Corpus pragmatics: Laying the foundations. In K. Aijmer & C. Rühlemann (Eds.), *Corpus pragmatics: Handbook* (pp. 1-26). Cambridge: Cambridge University Press
- Trosborg, A. (1995). *Interlanguage pragmatics: Requests, complaints and apologies*. Berlin/New York City: Mouton de Gruyter.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 三浦 愛香、Pragmalinguistic features of polite and impolite requests produced by Japanese English learners at the CEFR B1 level、大修館、査読無、67巻、2018、pp. 68-69
<https://www.taishukan.co.jp/book/b427687.html>

Aika Miura、Annotating the functions of learner utterances from a spoken corpus and assigning the degrees of their grammatical accuracy and discursal acceptability、Proceedings of Asia Pacific Corpus Linguistics、査読無、1号、2018、pp. 317-324

<https://www.researchgate.net/publication/332865315> Annotating the Functions of Learner Utterances from a Spoken Corpus and Assigning the Degrees of their Grammatical Accuracy and Discursal Acceptability

Aika Miura、Assessing politeness of requestive speech acts produced by Japanese learners of English in a spoken corpus、Language Value、査読有、9巻1号、2017、pp. 184-217
DOI:<https://doi.org/10.6035/LanguageV.2017.9.8>

三浦 愛香、学習者コーパスによる中間言語語用論分析：UAM CorpusTool Version 3.2 を用いた要求の発話行為のケーススタディ、語用論研究、査読有、18号、2017、pp. 48-59
http://pragmatics.gr.jp/content/files/SIP_018/SIP_018_2016_all.pdf

〔学会発表〕(計6件)

Aika Miura、Reliability and replicability of annotation schemes for learner corpora、英語コーパス学会第44回大会、2018

Aika Miura、Annotating the functions of learner utterances from a spoken corpus and assigning the degree of their grammatical accuracy and discursal acceptability、Forth Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC 2018)、2018

Aika Miura、Comparing polite and impolite linguistic patterns of requestive speech acts produced by Japanese learners of English、11th International Conference on Im/Politeness (Sympol 11)、2018

Aika Miura、Extraction of unsuitable pragmalinguistic features of requests produced by Japanese learners of English with low proficiency、4th Learner Corpus Research Conference (LCR2017)、2017

三浦 愛香、日本人英語学習者コーパスにおける要求の発話行為とポライトネス(2015年度関東支部研究支援プログラム成果報告)、外国語教育メディア学会(LET)関東支部 第137回(2016年度秋季)研究大会、2016

Aika Miura、An annotation scheme for identifying types of 'repair' in requestive speech acts produced by Japanese learners of English、Conference of the European Society for the Study of English (ESSE Galway 2016)、2016

6 . 研究組織

研究協力者

研究協力者氏名：野村 真理子

ローマ字氏名：NOMURA, Mariko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。